



似島臨時陸軍検疫所の竣工当日の写真。新平は、世間の非難を緩和し理解してもらうため、地域住民ら1,800人を招待して見学会を行った。大蒸気消毒汽缶の試運転も行い、検疫兵たちの予行演習の機会とした。

後藤新平の伝染病への挑戦

帰還兵23万人を検疫せよ

日清戦争の勝利に日本国民が沸き立つ1895（明治28）年の春。

その裏で23万人にも及ぶ帰還兵を水際で検疫する準備が、後藤新平によって進められていました。

郷土の先人、後藤新平はどのようにして、世界に例を見ない難事業に立ち向かったのか――。

新型コロナウイルス感染症に直面している今だからこそ、彼が歩んだ道をたどってみましょう。

大志を抱く青年医

後藤新平は1857（安政4）年、水沢伊達家（留守家）の家臣の家に生まれました。12歳で胆沢県庁の役人に給仕として採用されると、才能を見いだされます。大参事の安場保和は「この子は、大臣になる素質を持つている」と部下の阿川光裕に指導を託し、新平を教育させました。

14歳となった新平は、大志を抱いて上京します。しかし、主人と衝突し、わずか1年で帰郷してしまいます。失意の新平に手を差し伸べたのは阿川でした。「学費などを支援するので、医学の道へ進んではどうか」と提案します。阿川は、志が高く血気盛んな新平を危ぶみ、まずは医者になった方がよいと考えたのです。

新平は「学問ができるならば」と提案を承諾。16歳で阿川のいる福島へ行き、須賀川医学学校に入学します。初めて触れる物理学や化学、解剖学などに夢中になった新平は、驚異的な速さで進級。2年間で優秀な医師に成長しました。19歳で愛知県病院に就職する

と、オーストリアの名医・ローレッツ博士らの下で、診療や衛生、法医学などを学びます。

「コレラ」の戦い

1877（明治10）年、西郷隆盛が挙兵し、西南戦争が勃発します。負傷兵のために大阪陸軍臨時病院が造られると、新平は職を投げ打って大阪へ向かいました。院長の石黒忠恵に直訴し、雇われ医師として働くことを許されます。そのような中、神戸から恐るべき情報が舞い込みました。船で凱旋した兵士3000人が、コレラを発症して倒れたのです。政府は入港時に検疫する体制をとったものの、戦勝気

不眠不休の大建設

新平は、とても間に合わないと言う部下に「できぬのではなく、君がやらぬのだ」とげきを飛ばします。先頭に立って職務に当たり、1日の睡眠はわずか3時間。43日間も床に入らなかったそうです。一番規模が大きい似島では、数千人の工夫が昼夜を問わず海を埋め立て、急ピッチで工事が進められました。造成工事が一歩進めば、すぐに建築も一歩進める――。極端な場合は、梁や柱の建設が終わっていないのに、屋根をふき始めることもありました。

検疫事業の要となる大蒸気消毒汽缶の製造も簡単ではありませんでした。早く仕上げれば懸賞金を出すとか急かしましたが、不眠不休が続いた職工たちは、ハンマーを握ったまま眠ってしまったそうです。5月9日、工事が3分の2に達すると、新平は大胆にも検疫開始を6月初めに繰り上げると発表します。戦争の講和談判も影響しましたが、背水の陣を敷くことで、皆を奮い立たせる意図がありました。



若き日の新平とローレッツ博士。親身になって新平を指導し、衛生行政へと進む礎を築いた

前代未聞の検疫事業

1894（明治27）年、日本は清国（中国）と戦争をしていました。大陸では伝染病が流行し、負傷より病気で倒れる兵士の方が多かったのです。野戦衛生長官を務めていた石黒は、西南戦争での苦い経験から、帰還する兵士を検疫すべきだと訴えました。

石黒は、前例のない難事業を成し遂げられるのは新平しかないと考え、固辞する新平を説得。1895（明治28）年4月1日、新平は臨時陸軍検疫部の事務官長となり、未曾有の検疫事業に挑むことになりました。新平に課された任務は、7月1日から「彦島」「似島」「桜島」などに検疫所を開き、帰還兵23万人の検疫を行うこと。与えられた期間は、たった3カ月でした。



後藤新平（1857～1929）

水沢吉小路生まれ。医師、官僚、政治家。台湾民政長官、南満州鉄道初代総裁、逓信・内務・外務大臣、東京市長などを歴任。帝都復興院総裁として関東大震災の復興にも当たる。計画規模の大きさから「大風呂敷」とあだ名されたが、徹底した調査と先見の明に基づくものだった。

（写真は、検疫事業に当たった38歳ごろの新平）

